# 特撮ヒーローズオルタネイト

試し読み

著者／青空顎門

SAMPLE

想実堂

# 目次

第一話　『変身』……1
第二話　『闘争』……46
第三話　『呪詛』……102
第四話　『恐怖』……168
第五話　『戦士』……224
閑　話　『私は貴方の手』……300

試し読み
SAMPLE

# 第一話　『変身』

## ①運命の出会い

それは大学からの帰り道。国民的特撮ヒーロー番組、ブレイブアサルトのエンディングテーマ（処刑ソング）を口ずさみながら、とある曲がり角を曲がった瞬間だった。

突然、視界が光に包まれ、気づいた時には見知らぬ場所にいた。

茜色だった空は青空に変わり、細い路地ではなくグラウンドのような広場が目の前に広がる。

そこには二十名程の男女がいて、こちらをポカンと見詰めていた。

「は？」

六間雄也はその光景を前にして、間の抜けた声を出すことしかできなかった。

「何を召喚してるんです!?　アイリスさん！」

「……私のせいじゃない、です」

一瞬の静寂の後、年増の偉そうな女性が一人の女の子をこっ酷く叱り始める。どうやら年増は教師で、見た目中学生な少女は生徒らしい。

周りの男女も女の子のものと似た統一感のある服を着ているところから見て、ここは学校かそれに準じた施設のようだ。しかし――。

（学校……学校っぽいけど、うーん）

色々と違和感がある。

まず全員、制服っぽい服の上に中二マインドをくすぐる黒いマントを羽織っている。

初夏なのに暑くないのかとも思うが、まあ、そこまでならまだいい。演劇か何かで魔法使いのコスプレでもしているのかもしれない。

一部獣耳や角などを持つ者がいるが、それも同じ理由で特殊メイクと思えば目を瞑れる。

試し読み

西洋的な顔立ちも、ギリギリ許容できる。
だが、どう見てもおかしいところがあった。
それは、彼らの傍らに現実には存在しないファンタジーな生物が控えていることだ。
火を吹く蜥蜴や蠢くゼリー状の何か、背中に氷を生やした狼、羽ばたきもせず滞空する鳥等々。全て当たり前の顔で活動していて、明らかに作り物ではない。故に――。
（あ、異世界召喚だこれ）
広範囲にオタク趣味を持つ雄也はすぐに理解した。理解はしたが、何か行動を起こせる訳もなく呆然と立っていることしかできなかった。
「アイリスさん！　今すぐ送還しなさい！」
「……はい」
アイリスと呼ばれた女の子は不満げに返事をすると、こちらに近づいてくる。そして目の前で立ち止まった彼女は雄也を見上げた。
こうして相対すると、色々な部分を含めた背格好の小ささを意識させられる。
この場で一番小さいかもしれない。
髪の毛は琥珀色のセミショート、顔立ちは整っていて、怖いくらいの無表情を差し引いても美少女と言って差し支えない。
しかし、何と言っても目を引くのは――。
（獣耳美少女キターーーッ！）
普通の耳の上の辺りで、狼っぽい耳がピコピコと動いている。間違いなく獣人だ。
（……って、耳が四つ？）
小さく首を傾げる。常識で言えば、人間における聴覚器官としての耳は二つのはずだが。
（いや、でも、二次元イラストとかだと四つ耳派とかもいたしな……）
多分、特有の進化の仕方をしたのだろう。
（まあ、何でもいいか。可愛ければ問題ない。

可愛いは正義だ！）

そんな風に興奮していた雄也だったが――。

「……どこから来たの？」

鋭利な刃物のような冷たい口調に、冷や水を浴びせかけられたように我に返った。

「どこって……日本、だけど」

「……ニホン？」

素直に答えると、彼女は不満顔を崩して小首を傾げる。正直分からないだろうとは思った。

「えっと……多分……異世界？」

「……それじゃ送還できない」

困ったように呟くと、女の子はフイッと背中を向けて年増教師のところに戻っていく。

「……異世界なんてイメージできません。無理です。どうすれば？」

助けを求められた年増は、さすがに内容が内容だからか何も言えなくなっていた。

「一体何ごとだ」

と、そこへ幼い声色ながら不思議と大人びた響きを持った言葉がかけられる。

「こ、これは学院長。いえ、それが……」

焦ったような年増の視線を辿ると、そこにいたのは一人の幼い少女。

尖った長い耳にシルクの如く美しい銀髪のツーサイドアップ。空に輝く星を宿したような銀眼。神の祝福を感じる愛らしい顔立ち。

（エルフ!?）

背丈は小学生だが、その神秘的な姿は雄也がイメージするエルフに合致していた。

なら、学院長と呼ばれていることから考えても、見た目通りの年齢ではあるまい。即ち――。

（ロリババアか！）

そんな場違いな思考を繰り広げていた雄也を余所に、エルフ美少女が年増に話しかける。

試し読み

「またイクティナが魔法を暴走させたのか？」
「はい。今日は召喚魔法を。その余波でアイリスさんが異世界人を呼んでしまったようで……」
呆れたようなエルフ美少女の言葉に、申し訳なさそうに告げる年増。視線は離れたところで介抱されている別の女の子に向いている。
何やら、色々と状況が複雑に絡み合ってしまった結果のようだが……。
（暴走？　え、もしかして単なる事故？）
勇者になって下さい、とか、使い魔になれ、とかじゃないのか。
それは余りにも残念過ぎやしないだろうか。
「異世界人、だと？」
雄也が微妙に落ち込んでいると、エルフ美少女が厳しい視線を向けてきた。
「お前、名は何と言うのだ？」
「え？　あ、雄也です。六間雄也」
学院長という社会的地位のある人っぽいので素直に丁寧に答えておく。
対して彼女は「名字が先か」と呟き、仕切り直すように咳払いをしてから再び口を開いた。
「私の名はラディア・フォン・アルトヴァルト。七星王国（ヘプタステリ）が誇る王立魔法学院の学院長だ。すまないが、本当に異世界人か確認したい。私の前に立って貰えるか？」
「は、はあ、分かりました」
一先ず言われた通りにラディアに近づく。
すると、彼女は「うむ」と一度鷹揚に頷いてから手を握ってきた。
「な、え？」
手放しに美少女と言って差し支えない彼女の柔らかく温かい感触を急に感じ、色々と経験の足りない雄也はドギマギしてしまった。
（やるな、エルフロリババアめ。……けど、こ

試し読み

れは異世界の雰囲気に当てられたに過ぎない。
これで勝ったと思うなよ！）
　心の中で馬鹿な負け惜しみをしながら必死に平静を装っていると、ラディアが「ふむ」と小さく呟いて言葉を続ける。
「生命力Gクラス魔力Fクラス、属性は土。そして潜在能力が測定不能、と。確かに異世界人だな。だが、幼児並の生命力とは虚弱体質か？」
（何か、いきなり格づけされて盛大にディスられた……。いや、確かに平均より体力はないかもだけど、幼児並は言い過ぎじゃないかなあ）
　あるいは、その辺は異世界クオリティという奴なのかもしれない。それはともかく――。
「えっと、もしかして潜在能力とやらの部分で異世界人の判定を？」
「よく分かったな。潜在能力が測定不能となるのは異世界人だけなのだ。もっとも、測定可能でも異世界人だった場合も稀にあるそうだがな」
　どうやら必要十分条件にはならないらしい。
　とは言え、その口振りからすると異世界人としては特に珍しくもない性質のようだ。
　オンリーワンなチートじゃないのか。ちぇ。
「……それで、その、俺はどういう扱いに？」
「ああ。一先ず……っと、すまない。通信だ」
　ラディアは懐からエメラルドのような石を取り出し、それを額に当てる。
　少しして彼女は眉をひそめながら舌打ちし、美しい緑色の石をしまった。
「耳聡い奴め。まだ十分と経っていないぞ」
「どうかしたんですか？」
「いや、お前に会いたいという者がいてな」
「え？　俺に、ですか？」
「そうだ。構わないか？」
「はあ、まあ、いいですけど」

試し読み

「すまん」
心底申し訳なさそうに頭を下げるラディア。
正直外見が、えいえんのじゅうにさい、という感じの彼女にそんな態度を取られると罪悪感が半端ない。いけない趣味に目覚めそうだ。
「では、その者のところに移動するとしようか。……っと、その前に――」
ラディアは思い出したように顔を年増の方へ。
「ファリス。イクティナとアイリスには、魔法制御の補習をみっちりとさせておけ。いいな？」
「はい。学院長。厳しく指導致します」
「……酷い。巻き添え」
ファリスと呼ばれた年増は神妙に頷き、対照的にアイリスは不機嫌そうに不平を口にする。
「何が切っかけであろうと、制御を手放したのはお前だろう？　集中力不足だ」
ラディアは溜息をつきながら諭すように言い、それからこちらに向き直った。
「では、ユウヤ。行くとしようか。今から〈テレポート〉という一瞬で遠くの場所へと移動できる魔法を用いるが、取り乱さないでくれ」
異世界人への配慮を多分に含んだラディアの言葉に、雄也は静かに首を縦に振った。
しかし、内心では魔法や〈テレポート〉という単語に興奮気味だった。
（魔法キタコレ！　俺も使えるんだろうか。使えるなら夢が広がるなあ）
そんな呑気な思考を巡らしている間に、ラディアが再び雄也の手を取って「〈テレポート〉」と告げる。と同時に、景色がいきなり変わった。
「お、おお!?」
予告されていても、さすがに驚く。
周囲を見回すと、そこは白い壁に囲まれた正方形の狭い部屋だった。

試し読み

「えっと、ここは？」
「王立魔法研究所の〈テレポート〉用ポータルルームだ。さすがに天下の往来にいきなり出現する訳にはいかんからな。法律で所定の場所以外への〈テレポート〉は禁じられている」
「ああ。でしょうねえ」
もし通行人と重なる位置に出現したら、と想像するとゾッとする。そうでなくとも人が行き交う中に突然現れては事故の元だ。
「〈テレポート〉を使える程度の実力者であれば予兆を感じられるが、まあ、市井の人々全てにそれは望めんからな」
しかし、このポータルルームならニアミスしかけても、利用者は〈テレポート〉を使える実力者だけなので回避も可能という訳か。
「王立魔法研究所というのは？」
「名前の通り、魔法の研究を行う機関だ。勿論、魔法それ自体だけでなく、付随する全て、例えば先程私が使用した通信機のような魔動器と呼ばれる道具もまた研究対象だ」
ラディアは懐から緑色の石を取り出して示す。
外見は単なる綺麗なだけの石にしか見えないが、これが通信機の役割を持つらしい。
言葉を発していなかったことからして、念話の類の魔法を応用したものだろう。
（科学とは違うけど文明は結構な水準っぽいな）
周りに意識を向ければ、廊下の各所に赤い宝石が設置され、ぼんやりと光を放っている。
これはランプ代わりの魔動器というところか。
「それで、これから会う人ってのは――」
「……我が国の名誉魔法技師にして王立魔法研究所の特別研究員たる人物だ」
「魔法技師？」
「魔動器の設計、製作を行う者の呼称だ。名誉

試し読み

魔法技師はその最上位の者に与えられる称号だ。
まあ、いわゆる名誉職で特典はないがな」
説明をしてくれたラディアの表情は優れない。
「何だか浮かない顔ですね」
「正直、苦手でな。できれば会わせたくなどないのだが、拒否すれば確実に面倒なことになる。下手をすれば、お前を拉致しようとしかねん」
（拉致って、おい）
冗談かと思って彼女を見れば、その顔は真剣そのもの。俄然不安になってくる。
「ど、どんな人なんです？」
「変態だ」
一言で断じられ、雄也は一瞬言葉を失った。
それから恐る恐る確認のために口を開く。
「変態ですか」
「うむ。変態だ」
二度目の断言。どうやら聞き間違えではなかったらしい。不安は増すばかりだ。
「ともかく行くぞ」
扉を開け、部屋の外に出たラディアに従う。
ポータルルームと同じく真っ白な壁が続く廊下をしばらく歩くと、行き止まりに至った。
そこで彼女は足を止めて振り返る。
「ここだ」
「えっと、何もありませんけど……」
「そういう偽装が施されているのだ」
そう言ってラディアが白い壁に手を触れると、突然そこに扉が生じた。
（おおっ!?　うーん、異世界的だなあ）
驚く雄也を余所に扉をノックしかけるラディア。だが、そこで思い直したように振り返った。
「重ねて言うが変態だ。取り乱さないようにな」
それから彼女は、扉を二度軽く叩いた。
「入りたまえ」

試し読み
SAMPLE

許可を待って中に入るラディアに続くと――。
「よおおうこそっ!!　異世界の人間よ!!」
部屋に入って落ち着く間もなく、恐ろしく高いテンションで叫びながら一人の男が駆け寄ってきた。その余りの勢いに割と本気でビビる。
如何にもな白衣にぼさぼさの黒髪。大きく見開かれた目。その奥にある狂喜と狂気。
（マッドサイエンティストだこれ――っ！）
やばい解剖されるかも、と心に動揺が広がる。
（くそっ、ホイホイついてくるんじゃなかった）
ラディアに非難の視線を送ると、彼女は申し訳なさそうに目を逸らした。
「吾輩の名はワイルド・エクステンド。即ち！　ドクタアアアーッ・ワアアアイルドであーる!!」
そんな雄也達の反応を気にかけることなく、ドクター・ワイルドと名乗った男は過剰なハイテンションのまま自己紹介をしていた。
「は、はあ。あの、それで俺に何の用です？」
「勿論、用件は一つ。異世界の知識を見せて貰いたいのであーる！」
そう言ってドクター・ワイルドが伸ばした右手は、避ける間もなく雄也の頭に乗せられる。
「あの、何を？」
男にそんな真似をされて喜ぶような趣味はないのだが。そんな雄也の戸惑いの声は――。
「ファンタアアアッスティイイイーック!!」
狂喜で顔を歪ませた男の叫びに遮られた。
突然の絶叫に驚き、体がビクリと震える。
彼の顔は薬か何かで躁状態に入っているかのようにイってしまっている。
（ヤバい。マジで関わっちゃ駄目な奴だ！）
「素うん晴らしいいっ！　これは早速アレに改良を加えねばなるまい!!　フゥウーハハハッ!!」
雄也の頭から手を離し、両手を突き上げて高

試し読み SAMPLE

笑いをするドクター・ワイルド。
「あ、あのー……」
そんな相手に嫌々ながら声をかける。と、彼は動きをピタリと止め、何故か不機嫌そうにこちらに視線を向けた。そして――。
「まあだ、いたのか。もう帰ってよいのである」
ドクター・ワイルドはシッシッと野良犬でも追い払うような仕草を見せた。
「なっ――」
そんな勝手な態度にさすがにイラッと来て、雄也は彼に詰め寄ろうとした。
「待て、ユウヤ」
しかし、それはラディアに止められる。
「……ではドクター、失礼します」
彼女は申し訳程度に一礼すると、雄也の手を引いて素早く部屋を出た。
その時にはドクター・ワイルドは既に再び自分の世界に没入していて、雄也達の行動に何らかの反応を示すことはなかった。
「あれで済んだなら僥倖だ。さっさと帰るぞ」
「いや、何なんですか！　あの人は！」
苛立ち混じりに問うと、ラディアは力なく苦笑した。案の定の反応だとでも言いたげだ。
「言っただろう。変態だと」
「はあ……」
説明になっていないが、納得できてしまう。
やはり関わり合いにならない方がよさそうだ。
なので、突っ込んだ話を聞くのはやめておく。
「一先ず学院に戻るとしよう。〈テレポート〉」
ラディアがそう告げた次の瞬間、先程のポータルルームに似た小さな部屋に飛ぶ。
こうして変態との邂逅を終えた雄也は、ラディアと共に王立魔法学院へと戻ったのだった。
二度と彼と会う機会がないことを祈りながら。

試し読み
SAMPLE

だが、これが後々大きな影響を与える運命の出会いになるとは……雄也も薄々感じていた。
（正直、嫌な予感しかしない）

②そして全てが始まる夜

王立魔法学院に戻った雄也は、ラディアの案内で学院長室を訪れていた。
「さて、これからのことだが……その前にユウヤには謝らなければならないことがあるな」
「謝ること、ですか？」
「ああ。我が学院の生徒によって突然異世界に連れてこられたこと。そして……」
ラディアは言いにくそうに言葉を詰まらせる。
「元の世界に戻れそうにないこと、ですか？」
雄也がそう問うと彼女は息を呑んだ。
「……その通りだ。よく分かったな」
「いや、まあ――」
お約束だし。召喚事故を起こした張本人らしき少女が送還できないと言っていたし。
そう伝えると、ラディアは視線を下げた。
「すまない」
「いえ、大丈夫です。そこまで元の世界に未練はないようなので」
自分でも驚きだが、思った以上に元の世界に帰らなければという思いが弱い。
正直、この異世界への興味の方が強い。
（冷静に考えれば、おかしな心理状態だよな）
元々フィクション的な非日常への憧れが強かったのは確かだが、こんなに薄情な人間だったのかと内心で微妙に落ち込む。
両親も健在だし、友人も一応いたのだが。
「それは召喚の影響で刷り込まれているだけだ」
「え……も、もしかして人格に影響が？」

試し読み SAMPLE

何それ怖い。

「一部だがな。召喚魔法は本来この世界の生物を呼び出し、敵と戦わせるためのもの。故に元の居場所に戻りたい気持ちや戦闘への恐怖を減じ、忠誠心を高める副次作用を持つ。後は召喚者の言語を理解したり……痛みに耐性もつく」

サラッとつけ足されたが、召喚魔法のおかげで彼女らの言葉を理解できていたらしい。

改めて考えてみれば当たり前のことだが、異世界で日本語が通用する訳がない。

それはともかく今は意識への影響についてだ。

「でも、あの子への忠誠心なんてないですけど」

「まあ、忠誠心に関しては知能が高ければ余り影響は強く出ない。とは言え、微妙にアイリスに好意を抱き易くはなっているはずだ」

「はあ。そんなもんですか」

その程度なら問題ない……か？

「とにかく、だ。そうした部分も含めて謝罪させてくれ。ついては、この異世界での生活をサポートさせて貰いたい。一先ず我が学院への入学を考えているが、どうだろうか」

「助かります。元の世界に戻れないなら、ここで生きていく術を学ぶ必要がありますし」

ここで現実逃避せず冷静にそう結論できる辺りも、あるいは召喚の影響なのかもしれない。

とりあえず、無意味に取り乱さずに済んだとポジティブに考えておこう。

「では、明日からユウヤは魔法学院の生徒だ。これで身分はクリア。後は住居だが……寮は空きがなかったな。ならば、私の家が妥当か」

「え？　そんな、いいんですか？　どこの馬の骨とも知れない男を……」

「問題ない。家のメイドも私もそれなりに強いからな。それを前提とすれば、手元に置いてお

いた方がむしろ他への危険が少なくなる」
（あ、二人きりじゃないのか。そりゃそうか）
ちょっとホッとする。別に残念とか思っていない。合法っぽいが、外見が外見なので外聞が悪いかと思っただけだ。うん。
「もっとも、お前が邪な者ではないことぐらい私には分かっているがな」
「はあ。エルフとしての力って奴ですか？」
創作のエルフだとそういう能力を持っていることもあった気がするが……。
「エルフ？　何だそれは」
訝しげに問われて「あれ？」と思う。
「ラディアさんの種族じゃないんですか？」
「私は妖精人（テオトローブ）だ。エルフとやらではない」
この反応。エルフは存在しないらしい。
よくよく考えてみれば、これも当たり前か。
そもそもエルフは地球人の創作だ。
いくら外見が近い存在が異世界にいても、名前がそのままという偶然はあるはずもない。
翻訳機能も働かないだろう。
「だが、種族としての力というのは正解だ。我々妖精人（テオトローブ）は思考……とまではいかんが、大まかな感情であれば読むことができる。先天的にそうした魔法が常時発動しているのだ」
いわゆるパッシブスキル的なものらしい。
常時というと若干面倒そうだが、少なくとも悪党に騙されたりはしなさそうだ。
「そういう訳で私としてはお前を居候させるのは問題ない。後はお前次第だ。どうだ？」
「えっと、なら……よろしくお願いします」
頭を下げると、ラディアは安堵したように
「うむ」と頷く。強く責任を感じているようだ。
「では、我が家に向かうとするか」
そして彼女は再度〈テレポート〉を使用した。

試し読み

瞬時に視界が移り変わり、白い小部屋の中へ。
どうやら学院長宅の庭に〈テレポート〉してきたようで、その部屋を出ると真正面に実に立派な石造りの豪邸が建っていた。
（三階建てっぽいな。流石学院長って感じか？）
横目で建物の全体を観察しながら、ラディアと共に中に入る。すると――。
「お帰りなさいませ、ラディア様」
当然の如くエントランスにメイドが立ち並んでいて、慇懃に出迎えてくれた。
「そちらの方は？」
「今日からここに住むことになった異世界人のユウヤだ。居候ではあるが、私の身内として扱って欲しい。それと二階の空き部屋の一つを整えておいてくれ。ユウヤにはそこを使わせる」
そんな感じにエントランスに集まったメイド達への紹介と指示が済んだ後、ラディア自ら屋敷を案内してくれることになり、雄也は彼女と共に一通り中を見て回った。
（しっかし、いかにもな洋館だなあ。あ、やっぱり暖炉があるのか。ってか、随分と部屋が多いみたいだな。メイドさん達、住み込みかな）
そして最後に、自室となる予定の部屋へ。
（六畳ぐらいの広さか。一人なら十分だな。テレビとかパソコンなんてないだろうし。うん。ベッドと机、本棚ぐらいは置けそうかな）
案内が終わると、中々いい時間になっていてラディアと共に夕食を取ることになった。
ファンタジーな食事を少しだけ期待したが、パスタがメインの普通の洋食だった。
（魔物的生物の丸焼きとかが出ても困るけど）
味は申し分なし。美味しく頂きました。
そして風呂（普通に浴槽に浸かる形式）に入り終えたところで一日の疲れがドッと出て、雄

試し読み SAMPLE

也は今日のところは早めに休むことにした。
一応、その旨を伝えるとラディアは「それがいい」と頷いてくれた。
「明日からは忙しくなるだろうからな」
そう続けた彼女に就寝の挨拶をしてから、メイドが整えてくれた自室に入る。
それから雄也はすぐにベッドに潜り込んだ。
（にしても異世界、か。どうなることやら）
そのまま目を瞑ると、待ち構えていたかのように強烈な眠気がやってきたので身を委ねる。
そんなこんなで異世界に召喚されるという激動の一日が終わろうとしていた。
しかし、まだ波瀾万丈の異世界初日が完全に終わった訳ではないことを、眠りにつく直前の雄也は全く意識していなかった。

余りの眩しさに目を覚ます。すると、雄也は大の字に仰向けになった状態で拘束されていた。
「な、にが……？」
視界には手術室にある無影灯があり、その光のせいで視線を動かしても周囲は窺い知れない。
「よおおやくお目覚めか。異世界の人間よっ！」
「その声は……ドクター・ワイルド!?」
「如何にもっ！　ドクタアアアアアーッ・ワアアアアイルドであーる！」
相変わらずの暑苦しいハイテンションに文句の一つも言いたくなる。が、今はそんなことに突っ込みを入れている場合ではない。
「な、何のつもりだ！」
「貴様ならば、このシチュエーション。どういうことか分かるはずであろう？」
拘束され、手術台の上。
傍にはマッドサイエンティスト。
「まさか……改造、手術か？」

試し読み SAMPLE

可能性としては人体実験とか色々とあるだろうが、雄也がまず想像したのはそれだった。

何故なら雄也は、オタクはオタクでも特オタの成分が強いオタクだったからだ。

特オタ。特撮オタク。

特撮番組に夢中になるのは男の子なら多くが通る道だろうが、稀にそこに留まる者もいる。

そうした子供心を持ち続ける者の名がそれだ。

その一人である雄也は、数ある特撮の中でも等身大の変身ヒーローを特に愛していた。

人生の大事なこと、男の生き様、その全てをそこから学んだと言っても過言ではない。

そんな雄也が、この状況をそう真っ先に認識するのは無理もないことだろう。

「その通おおおり！　これで貴様も晴れて変身ヒーローの仲間入りができる訳だ。よかったであるな、フゥウーハハハハハッ!!」

「何を言って――っ！」

「記憶を覗いた吾輩には分かるのである。貴様の内に秘めたヒーローへの強おおい憧れが！」

ドクター・ワイルドの言葉に思わず口を噤む。

（ぐっ、悪かったな。二十歳にもなって、まだ中二病が完治してなくて！）

だが、変身ヒーロー好きで、彼らのような存在への憧れを持たない者は少ないはずだ。

大っぴらには口に出さないだけで。……多分。

「それを叶えてやるのだ。喜んではどうかな？」

しかし、突然そんなことを言われても、額面通りに受け止められる訳がない。

「ドクター・ワイルド……一体何が目的だ」

愉悦に塗れたその声に苛立ちを覚えつつも、雄也はその感情を押し殺して尋ねた。

「吾輩の目的は唯一つ。人類の進化である」

「進化、だと？」

試し読み

「説明しよう！　なのであーる」
　馬鹿にしたような台詞に眉をひそめながらも我慢して耳を傾ける。
「この世界には七種の人類がいる。即ち吾輩や貴様のような基人（アントロープ）、そして龍人（ドラクトロープ）、水棲人（イクトロープ）、獣人（テリオントロープ）、翼人（プテラントロープ）、妖精人（テオトロープ）、魔人（サタナントロープ）である。詳細は省くが基人（アントロープ）以外は全て、基人が進化した種族なのである」
「進化した姿？」
「この世界には魔力が溢れている。魔力には火、水、土、風、光、闇の属性があり、基人（アントロープ）を除く六種族は各属性に特化した人類なのである」
　そこで一旦言葉を切ったドクター・ワイルドは大きく息を吸い込み、大声で続ける。
「しかし！　その進化は二千年もの昔に起こったこと。以来、人類は何一つ進化していない。特に進化から取り残された基人（アントロープ）に至ってはそれ以前からである！　結果、基人（アントロープ）は生命力、魔力共に他の種族には勝てず、劣等種扱いされることもある」
（……俺達のような人間が、劣等種？）
　そこに違和感を持つのは、創作世界ではいわゆる亜人が虐げられているのがテンプレ故か。
　学院長を思わずエルフと呼んでしまったことと言い、異世界もののステレオタイプに囚われないよう気をつけた方がいいのかもしれない。
　そんな感じに雄也の思考が現実逃避気味に横道にずれている間にも、狂科学者の話は続く。
「だが、基人（アントロープ）は文字通り人類の基本。本来多様な進化が可能のはず。故に吾輩は基人（アントロープ）を進化させる研究を進めてきたのである！」
　そこまで言い終えると、ドクター・ワイルドは雄也の視界を照らす無影灯を消した。
　それとほぼ同時に雄也が乗せられていた台が

稼働し、頭の側から起き上がる。
「これは吾輩のこれまでの研究成果である」
彼の言葉を合図に壁が動き、その奥から人を入れられる程の巨大なカプセルが現れた。
続いてバックライトが光を放ち始め、中に入れられた存在、基人（アントロープ）の男を照らし出す。
そう雄也が認識した瞬間、意識がない様子の男の首元に注射器が近づいた。それはそのまま彼の首に刺さって液体を注入していく。
すると彼は限界以上に目を大きく見開き、苦悶の表情を浮かべ始めた。そうしている間に体が少しずつ異形のものへと変化していく。
「な、何を――っ！」
「黙って見ているのである」
やがて彼は蜘蛛と人間が混じり合ったような異様な姿を取り、しかし数秒の後、その体は端からボロボロに崩れ去っていった。
後に残るのはカプセルを満たす液体のみだ。
（死んだ、のか？　こんな呆気なく、人が？）
突然の事態。非常識な状況。ドクター・ワイルドの演技がかった口調。加えて死体が綺麗さっぱり消えたがために眼前の光景に現実味がなく、呆然とすることしかできない。
「見ての通り、強制的に体を進化させても人間には耐えられない。だが……」
ドクター・ワイルドが指をパチンと鳴らすとカプセルは壁の奥に消え、新たなカプセルが姿を現す。その中にも基人（アントロープ）の男の姿があった。
そして、再び首元に注射器が現れ――。
「や、やめろっ！」
同じ展開を予想して思わず叫ぶ。
しかし、雄也の予想に反し、カプセルの中の彼は蝙蝠と人間が融合した姿で安定した。
「な、これは……」

試読用

「強制進化に用いられるこの液体の中心成分は、高濃度の魔力が結晶化することによって生まれし魔法結石を液化して超濃縮したものである」

雄也の動揺を余所に、ドクター・ワイルドは説明を再開する。

「これに貴様の細胞を更に添加することで副作用を抑制し、人間を強制進化させることが可能となるのである。何故だか、分かるか？」

そう問いながらも返答を全く期待していなかったのか、彼はすぐさま再び口を開いた。

「この世界の人類が強制進化に耐えられず、また千年以上も進化できずにいるのは進化の因子を失っているからである。しかし！　異世界人たる貴様はそれを持つ。つまり、その因子を付与できれば新たな進化が可能なのであーる！」

そう言いながら、喜悦で口元を歪め続ける男。

それを視界の端に収めながらも、雄也はカプセルの中の彼に意識の焦点を合わせていた。

「この人は――」

「んん？」

「この人は……どうなる？」

一度目とは異なり、目の前に結果が存在し続けているが故に、今度こそ確かな現実感が雄也を襲っていた。付随的に最初の男性の死もまた事実として突きつけられる。

それを処理し切れぬまま雄也は呆然と尋ねた。

「元に、戻れるのか？」

「発生させた魔力を抜き取れば元に戻るが、実質的には不可能である。ああ、心配せずとも貴様の場合は基人（アントロープ）に戻ることは可能であるぞ。最初に変身ヒーローと言ったであろう」

「何故――」

「このモルモットには液化魔力結石と進化の因子のみを使用しているが、貴様の場合は魔力結

試し読み SAMPLE

石だけでなく魔力吸石をも併用した魔動器を使用する予定だからである」

欠片も罪悪感を見せず嬉々として説明を続けるドクター・ワイルドの姿に、これまでの苛立ちが少しずつ怒りに転化していく。

「ちなみに魔力吸石とは対応属性の魔力を蓄積でき、任意に放出可能な石のことである。加えて言えば、貴様用に調達した国宝級の超高純度高密度のそれと同等品を用いねば、濃縮された液化魔力結石の効果は打ち消せないのである」

「そんなことを聞いてるんじゃない！　何故、こんな真似をする!?」

「言ったはずである。人類の進化のためだと」

（くっ、ああ、そうだったな！）

脳内で吐き捨てる。怒りの余り問いを誤った。

「何故、こんな真似ができる!?　お前には、倫理ってものがないのか!?」

「進化を忘れた無価値な塵芥が、進化の礎となるのだ。モルモットとしての価値を与えてやったことを感謝されてもよいぐらいであろう」

「な、に？」

まさかリアルでそんな身勝手を抜かす者が存在するとは夢にも思わず、一瞬思考が停止する。

そして理解する。目の前にいる人間は、自分とは決して相容れない存在であることを。

「お前は……狂ってる！」

「当然である！　狂気の中にしか進化は存在し得ん。吾輩にとっては最上の褒め言葉である」

話にならない。

拘束され、主導権も何もないことも忘れ、雄也はドクター・ワイルドを睨みつけた。

「その目、その怒り。やはり貴様は吾輩の……ひいては奴の宿敵となるに相応しい」

「何を言って――」

試し読み SAMPLE

「さあ、改造手術と行こうではないかっ！」
雄也の言葉を遮った声を合図とするかのように壁が再び稼働し、雄也の目の前に鏡が現れる。そこに映されたのは上半身裸の自分の姿だった。
「な、何を――」
雄也の戸惑いの声を黙殺して一旦視界から外れるドクター・ワイルド。彼はすぐにあるものを手に雄也の眼前に戻ってきた。
「それは、まさか――」
見覚えある巨大なバックルのついたベルト。
それは国民的特撮ヒーロー番組ブレイブアサルトシリーズの第一作目において、主人公たる本能寺武人がブレイブアサルトに変身するためのアイテム、アサルトドライバーに似ていた。
「魔力吸石の力を十全に引き出す魔動器、ＭＰドライバー。貴様の記憶を参考に外観を変更し、また進化形態への変身のみならず魔力を物質化して装甲を作る機能を追加しておいた。勿論、形状もブレイブアサルトを参考としている」
そう告げたドクター・ワイルドは、そのＭＰドライバーとやらを雄也の腹部に押しつける。
次の瞬間、雄也は何かが体を侵食してくるような強烈な不快感に襲われた。
「ぐ、あ、あああっ」
低く呻きながら苦しみを紛らわすために目を固く閉じようとする。が、何かに阻まれ、僅かたりとも瞼を動かすことはできなかった。
「目を背けるな。己の姿を見て進化を自覚せよ。そして知れ！　人の持つ可能性を！」
鏡に映る己が、人の形を保ちつつ異形と化す。
「う、あ、くっ、ぐあああっ」
まず狼と融合したかのような姿に変わった。
かと思えば、再び変化が始まる。
次に現れたのは鷲の特徴。続いて鮫の魚人の

試し読み

如くなり、最後に龍人としか表せない姿へ。
　更にその直後、その全身を、純白を基調に紅の紋様が描かれた装甲が包み込んだ。
（これ、は……ブレイブ……アサ、ルト？）
　勿論そのものではないが、雰囲気は似ている。
　苦痛に耐えながら雄也がそう思った刹那、それまでの不快感は消え、苦しみもなくなった。
　代わりに、体力を根こそぎ奪われたかのような虚脱感が襲ってくる。
「停滞は終わりを告げ、再び全てが始まるのである！　フゥウーハハハハハッ!!」
　満足げな男の言葉が少しずつ遠ざかっていく。
　体力を全て失い、意識を手放そうとしていることを自覚する。抗うことはできない。
　それを彼も気づいているのか、もはや雄也の存在はないものとして己の世界に浸っていた。
「待っているがいい。――よ」
　もはや五感もまともに働かなくなり、彼の声が歪み、聞こえなくなっていく。そして……。
「そうだ。全ては――に奪われし――を、そして――を取り戻すために！」
　その音を最後に雄也の意識は途切れた。

## ③登校初日に迫る狂気の影

「実は昨日、王城に奴が侵入して国宝の魔力吸石を盗み出したらしいのだ。それで現場検証の応援として緊急に呼び出され、碌に眠れなくてな。ああ、魔力吸石というのはだな――」
　朝食の際、疲れ果てた様子で現れたラディアに開口一番どうしたのか尋ねたところ、そんなことを教えられて雄也は愕然とした。
（その魔力吸石ってアレに使われた奴だよな）
　昨夜のことを思い出しながら心の中で呟く。

試し読み SAMPLE

（相談するのは、やめといた方がいいかもしれない。お世話になる人に申し訳ないけど……）

しかし、ドクター・ワイルドは国宝級とか言っていたが、モノホンの国宝だったとは。

これでは、もしアレに使用されて雄也の体内にあると知られれば、殺してでも奪い返す、となりかねない。くわばらくわばら。

（にしても昨日の今日で落ち着いてるな、俺）

誤魔化しようのない人の死を目撃した上、己が異形と化す様まで目の当たりにしたにもかかわらず、冷静に受け止めている自分がいる。

（これも召喚の影響って奴なのかな）

あるいは目覚めたら自室にいたことを理由に据え、現実逃避でもしているのか。

……残念ながら、ＭＰドライバーの存在を確かに感じるので夢ではないことは明らかだが。

起きがけには全身に強烈な違和感もあったし。

ちなみに、その感覚は身嗜みを整えている間に薄れてなくなってしまった。

（変に動揺するよりマシってことにしとこう）

そうこう考えていると彼女の説明が終わる。

内容自体はドクター・ワイルドと同じだった。

「にしても王城の警備、ざるじゃないですか？」

「そもそも警備は魔動器に頼り切りだからな。それを作った本人からすれば、侵入など赤子の手を捻るようなものだろう」

「はあ、成程。……この家はどうなんです？」

「私は奴を信用していなかったからな。その手のものは全て自作だ。腹立たしいことに奴製に比べて大分性能は落ちるが、それでも私が敷地内にいれば鼠の一匹まで居場所を把握できる」

（ああ。つまり、俺がアイツに拉致られたのはラディアさんが緊急招集で家を離れた後か。国宝の窃盗は一石二鳥の手だったんだな）

試し読み

「で、ドクター・ワイルドの行方は――」
「分からん。研究室ももぬけの殻だ。研究資料などは残っていたが……」
恐らくそれは、本命の研究ではなかったが故に放置されたものに過ぎないに違いない。
あの手術室染みた部屋もそうだが、本命は彼のみが知る秘密の場所にあると考えるべきだ。
ラディアも同じ考えらしく、表情は苦い。
「まあ、その辺の調査は騎士達の仕事だ。ユウヤが気にする必要はない」
そうは言うが、さすがに完全に無関係とは思えず複雑な気持ちを抱く。ただ、現状対処できる問題ではないので静観するしかないが。
「さて、そろそろ学院に向かうとしようか」
オートミールが主体の朝食を終え、食後の小休憩を挟んでからラディアが言う。
「了解です」
何にせよ、優先すべきは異世界で生きる地盤を固めることだ。そう考えて同意を示す。
対して彼女は「うむ」と頷くと、傍に来て雄也の手を取った。ここから学院に飛ぶ気らしい。
「では、行くぞ。〈テレポート〉」
その言葉を合図に食堂から王立魔法学院のポータルルームに一瞬で移動する。
瞬く間に目の前の光景が移り変わる様にはまだ戸惑いがあるが、少しは慣れた気がする。
（しっかし便利だなあ。この魔法）
出現先に若干の制限があるとは言え、移動時間を短縮できるのは素晴らしい。人生において移動するだけの時間程無駄なものはないし。
「さあ、こっちだ」
一先ず職員室に向かうらしいラディアの後に続きながら、雄也は「この魔法を会得できたらいいなあ」と呑気に思ったのだった。

＊＊＊

（緊張しているのか？）

朝食中、視線が揺れに揺れていたユウヤを見てラディアはそう思った。

妖精人（テオトローブ）の特性として常時発動している光属性の魔法〈シンパシー〉を通じ、今も彼の戸惑いのような感情が伝わってきている。

下ろし立ての制服が馴染まないのだろうか。

（いや、これは罪悪感、か？）

〈シンパシー〉は相手の感情を感じ取ることしか能のない魔法だ。思考まで読める訳ではないし、感情の把握にしても正確とは言いがたい。

悪意などの負の感情なら、こちらも不快な気持ちになるため、かなり分かり易いのだが。

（世話になって心苦しい、というところか）

そう考えたラディアは「やはり悪い人間ではないな」とユウヤの評価を高めた。

昨日の応対の中で負の感情を向けられたことはなかったし、最も多く感じたのは感謝だった。

ドクター・ワイルドにはかなり苛立っていたようだが、そこはむしろ共感（シンパシー）を抱く部分だ。

極普通の善良な青年と見ていい。

（この家での生活には、いずれ慣れるだろう）

ラディアは若干苦笑しつつ「そろそろ学院に向かうとしようか」と告げた。

それからユウヤの「了解です」という返事に頷き、特に深く考えずに彼の手を握る。

「では、行くぞ。〈テレポート〉」

使用者の属性に関わらず使用できる無属性の空間移動魔法を行使する傍ら、懐の魔動器が自動で起動する。昨日も使用した〈アナライズ〉という魔法が組み込まれたものだ。

効果は触れた相手の能力の計測。

試し読み SAMPLE

他人に直接触れるのは〈アナライズ〉を行う時ぐらいなので、接触を作動条件にしてある。

何かしら訓練をした訳でもなし、一日で大きな変動がある訳がないのだが――。

（な、こ、これは!?）

その結果を感じ取ったラディアは、驚きを隠すので精一杯だった。幸いユウヤは視界の変化に気を取られ、気づいていないようだが。

（生命力、魔力共にCクラス!? しかも、属性が土に加えて火、水、風が増えている。昨日の今日で、どういうことだ!?）

内心の動揺を顔に出さないように自問する。

昨日の時点では生命力がGクラス、魔力はFクラスに過ぎなかったはずだ。

（あり得ない）

百歩譲って一つクラスが上がる程度ならばないとは言えない。勿論、それにしたって相当の鍛錬を積まなければ不可能だが。

にもかかわらず、特に何もしていないはずのユウヤが、それぞれ三段階以上の上昇を見せている。

これは赤ん坊がいきなり大人になるぐらい常識の埒外にある話だ。

（まさか、ドクター・ワイルドが何か――）

国宝盗難事件から一日経っていない状況で、二つを結びつけるのは無理もないことだろう。

勿論、正解がどうあれ、推測を鵜呑みにする程よくも悪くもラディアは愚かではないが。

（いや、証拠はない。決めつけは早計か）

何にせよ、ドクター・ワイルドの事件に続く新たな悩みの種が生じたのは確かだ。生来の性格のせいで気づかなかったことにはできない。

ラディアは頭を抱えたくなるのを我慢しながら、ユウヤを引き連れて職員室を目指した。

試し読み

＊＊＊

七星（ヘプタステリ）王国が誇る王立魔法学院は名前の通り、魔法や魔動器の知識を学ぶ機関らしい。広く門戸を開き、年配の人も時折入学するとか。

授業内容や期間で色々コースが設定されており、入学金や授業料は選んだ内容で変動する。

金を用意可能かが唯一の条件と言っていい。

今回雄也は、最も一般的なコースである三年コースの一年A組に入ることになっていた。

理由は雄也を召喚した張本人、アイリスがいるからだそうだ。

担任が昨日の事情を知る年増な女教師、ファリスであることも要因の一つかもしれない。

「異世界から来ました。六間雄也です。二十歳です。よろしくお願いします」

そんなこんなで三年コース一年A組の教室で。

雄也はそう簡易な自己紹介をして頭を下げた。

それから顔を上げて教室全体を見渡す。

（……近代ヨーロッパ風の学校、って感じかな）

支柱まで木製の机と椅子は当たり前。勿論、校舎は石造り。現代日本の教室と比べると微妙に薄暗い辺りも逆に雰囲気が出ている。

（ってか、もうあれだな。イギリスの魔法学校）

そんな身も蓋もない評価を下しつつ「あ、雄也の方が名前です」と最後につけ加えておく。

続いて、態々教室までついてきてくれたラディアが一歩前に出て口を開いた。

「召喚魔法を選択した者は既に知っているだろうが、昨日アイリスが事故で召喚した異世界人だ。この世界に適応するため、お前達と共に学ぶことになった。よくしてやってくれ。特にアイリスは責任を持ってサポートするように」

そんな言葉と共にラディアから視線を向けら

れたアイリスは、相変わらず不満顔だ。
「アイリスさん、分かりましたか？」
「……はい」
ファリスの問いに渋々返事をするアイリス。
申し訳ないが、この子で大丈夫か心配になる。
「アイリスは優秀な生徒だ。頼っていいぞ」
そんな気持ちを読んだのか、ラディアが苦笑気味に言う。なら信じよう。
「それとイクティナ。お前もユウヤを気にかけてやるように。間接的とは言え、お前の魔力暴走が引金でもあるのだからな」
「ひゃ、ひゃい！　わ、分かりました！」
ラディアの指示に、あの場で介抱されていた少女が過剰に背筋を正して返事をする。
反射的に承諾したようで、こっちはこっちで不安だ。そんな視線を向けていると……。
「まあ、もののついでだ。一応、選択肢は複数あった方がいいだろう」
ラディアは割と酷いフォローを入れた。
「ついで……わたし、ついで……」
しかし、落ち込むイクティナは黙殺される。
そんな彼女に向けられる生温かい視線。何となく、クラスでの立ち位置が透けて見える。
雄也は思わず憐れみの視線を送ってしまった。
「では、それも考慮して一部席替えを行いたいと思います。まずはユウヤさんの席ですが――」
一先ず、ファリスの指示に従って席につく。
場所はアニメ主人公の指定席と名高い窓際の一番後ろの席……の隣。肝心の窓際にはアイリスが、逆側にはイクティナが移ってきている。
ちなみに、アイリスの席の机と椅子は今日追加したものらしく元は空白地帯。
雄也とイクティナの席に元々座っていた生徒達は、アイリス達二人の以前の席に移っている。

試し読み SAMPLE

「ええと、改めて……六間雄也です。よろしくお願いします、アイリスさん」
イクティナはまだネガティブな雰囲気を漂わせているので、まず彼女に自己紹介を繰り返す。
「……アイリス・エヴァレット・テリオン。アイリスでいい。丁寧語も必要ない」
対して再び鋭い半眼をこちらに向けるアイリス。だが、簡潔な言葉ながら声色には刺々しさはなく、別に不機嫌という訳ではなさそうだ。
これが彼女のニュートラルな対応のようだ。
不満の矛先が向いているのは教師のみらしい。
「分かった。よろしく、アイリス。俺のことも雄也でいいよ」
「……ん。よろしく、ユウヤ」
彼女は無表情のまま、僅かな動きで頷いた。
その頃にはイクティナも気を取り直した様子だったので、今度はそっちに顔を向ける。
「えと、イクティナ・ハプハザード・ハーレキンです。皆さんと同じくイーナと呼んで下さい」
少し慌てたようにペコリと頭を下げ、自己紹介をするイクティナ。よくよく見ると、彼女は彼女で素朴な顔立ちの可愛らしい女の子だ。
長く腰まで伸びた癖のある髪は地球ではあり得ない自然な緑色で、自信なさそうな緑の瞳と合わせて端整な顔を引き立てている。
垂れ目のおかげで主に癒し系の方向に。
「よろしく、イーナ」
「よ、よろしくお願いします、ユウヤさん」
しかし、これだけ可愛い女の子が両隣。男子からの嫉妬が凄いのではないだろうか。
そう思って周囲を見回すと、何故か憐れみの視線が多いことに気づく。それも性別問わず。
（いや、どーゆーこと？　何かのフラグか？）
首を傾げている間にファリスとラディアが教

試読版

室を出ていき、生徒達が立ち上がる。
（ん？　何が始まるんです？）
雄也が周囲をキョロキョロ見回していると、アイリスが無表情のまま肩をつついてくる。振り返ると、彼女は一拍を置いて口を開いた。
「……一時間目、グラウンド」
説明はありがたいが、簡潔過ぎて今一ピンと来ない。とりあえず立ち上がるけれども。
「あ、一時間目は基礎戦闘訓練の授業なので、運動着に着替えてグラウンドに移動です。ユウヤさんは多分、今日は見学だと思いますけど」
イクティナがフォローしてくれて納得する。
「……先に、行ってて」
「ええと、わたし達は着替えてくるので……」
「ああ、うん。了解」
一先ず二人と別れ、先にグラウンドに向かう。
他の生徒の姿はないが、担当教師（獣人の男性）とラディアが何ごとか話をしていた。
彼女の視線が時折こちらに向いていることからして、話題の対象が何かは予想できる。できるが故に少し内容が気になってソワソワする。
（まあ、当たり障りのない話だろうけど）
その様子を眺めていると、着替え終わった男子生徒が集まってくる。皆ジャージに似た紺色の、半袖半ズボンの運動着姿だ。しかし――。
（何故、少し離れた位置で止まる。俺も集団に入れてくれよ）
彼らはこちらを意識しつつも近づいてこない。だが、こちらから近づくのは少々躊躇われる。
結果、雄也は嫌な距離間で一人ポツンと立っている状態になってしまった。
（これがボッチか……）
そうこう考えていると、集団に近い位置にいるが、端で一人だった男子生徒が近づいてきた。

彼は他の生徒に比べ、かなり大人びた雰囲気の青年だった。制服を着ているので同級生だが。

「ユウヤ・ロクマ、でよかったか？」

「あ、ああ。えっと、君は――？」

「アレス・スタバーン・カレッジだ。アレスでいい。よろしく、ユウヤ」

気のいい笑顔を見せる彼は間違いなくイケメンだった。自然な青髪に碧眼。整った顔立ちに力強い体格。男女関係なくモテそうだ。

「よろしく、アレス。……ところで、不躾だけど一つ聞いてもいいか？」

「何だ？」

「どうして皆、遠巻きに見ているだけで話しかけてこないんだ？　転入生は質問攻めにされるものだと思ってたんだけど……」

イケメンや美少女に限るのかもしれないが。

「それは……仕方がないと思うぞ。ユウヤは俺と同じ二十歳なんだろう？」

アレスの問いに首を縦に振る。

昨日ラディアに確認したところ、こちらの暦は一ヶ月三十日が十二ヶ月プラス年末年始に三日から四日の補正期間を取る形らしい。ちなみに一日は二四時間（体感的に一時間は地球の一時間と同じぐらい）で一週間は七日で同じだ。

なので、再計算しても年齢はほぼ変わらない。

「年上ってだけでまず一つ壁があるからな。クラスのほとんどは十五歳だし」

「……この学院って幅広い年齢層の生徒がいるんじゃないのか？」

「確かにそうだが、それは一年コースや三ヶ月コースの場合だ。三年コースには余りいない。精々クラスに一人か二人ぐらいのものだ」

アレスの説明に「成程」と納得する。

この世界の成人は十八歳であり、大体そのく

試し読み
SAMPLE

らいで親元から離れるのが普通らしい。
二十歳やそこらでは、ようやく生活基盤が整ってくる頃だろうし、そんな時期に三年もの時間がかかるコースを選択する可能性は低い。
何らかの事情で現役入学できなかった者、という前提条件もあるのだから尚更だ。
（なら、アレスにも何か事情があるんかな？）
そう疑問に思うが、さすがに今問うのは不躾どころではない。自重しておく。
「まあ、お前の場合は、それに加えて狂戦士アイリスと破壊魔イーナが世話役になったことも少し関係しているかもしれないな」
「きょ、狂戦士？　破壊魔？　随分物騒だな。女の子につける呼び名じゃないだろ」
「仕方がないさ。アイリスは目つきが悪い、無愛想だからと先輩に絡まれてキレた挙句、相手を半殺しにして恐れられている。イクティナは制御の甘さから魔法を暴発させて備品を色々と破壊しているからな」
「あー……」
つまりクラスで感じた憐れみの視線は、これまでの二人の所業故か。
「イクティナの方はまだ単なる落ちこぼれで済んでいて、あの性格のおかげでクラスのマスコットのような扱いだが、アイリスの方は完全に腫れものに触る感じだな。彼女は彼女で、それで構わないというような顔をしているが」
いずれにしても、二人もまた若干浮いている子と考えて間違いないようだ。
「……っと、噂をすれば、その二人だ」
アレスの視線を辿ると、着替え終えた女子の集団の後ろから歩いてくる二人が見えた。男子同様、ジャージのような服で少々野暮ったい。
「まあ、色々と言ったが、所詮は他人の評価だ。

試読版 SAMPLE

ユウヤ自身の目で見極めるといい」
「……なら、何でそんなことを？」
「今この話を知って相手を色眼鏡で見る奴は、後から知っても態度を変えるだろう。なら、変にこじれる前に関係を壊した方が互いのためだし、そうでないなら何の問題もないだろう？」
そう言うとアレスは離れていった。
そんな彼の背中を見送る。
（うーん。何かイケメンオーラが出てるなあ）
「……ユウヤ、お待たせ」
声をかけられ、振り向くと二人がすぐ傍に。
「では、基礎戦闘訓練の授業を始める」
そうしてクラス全員が集まったところで獣人（テリオントロープ）の男性教諭が口を開く。
ちなみに、雄也達三人は男子の集団からも女子の集団からも少し離れた位置にいる。
アレスはと言うと、二つの集団の合間にうまいこと溶け込んでいた。
「見学者は学院長のところへ」
その指示を受けてラディアの下に向かうと、何故かアイリスとイクティナもついてきた。
「アイリスさんは相手になる人がいないので自習なんです。生命力がＡクラスなので」
疑問を先回りして答えるイクティナだが、説明が不十分だ。主に彼女自身の事情について。
問うように見ると彼女は誤魔化すように視線を逸らし、先程とは逆にアイリスが口を開く。
「……イーナは危険。主に模擬戦の相手が」
「暴走した魔法は何が起こるか分からんからな。さすがに人に向けては使わせられん。もう少し制御が上達するまでは見学だ」
ラディアが苦笑気味に補足を加える。
「それはともかく、見学も授業の一環だぞ？しっかりと見て学ぶことだ。学院長たる私の前

試し読み

でサボりは許さ――」

彼女はそこでハッとしたように言葉を切り、突然ある方向を見据えた。

「……ラディアさん？」

問いかけに返答はない。困惑したように「これは……何だ？」と自問するばかりだ。

「どうしたんですか？」

再度の問いかけ。アイリスとイクティナの疑問の視線。それを受け、ようやく我に返った様子のラディアは焦ったように叫んだ。

「授業は中止だ！　全員、教室に戻れ！」

「え？」

が、突然のことに皆、戸惑うのみで動かない。

「く、間に合わん！　〈ホーリーヴェール〉!!」

ラディアの言葉と共に、グラウンドにいる全員を包むように半透明の光がドーム状に生じる。

その現象に何かしら反応をする暇はなかった。

直後、上空から高速で飛来した何かが、魔法が生んだ光の障壁にぶち当たったからだ。

大型車が正面衝突したような轟音が生じ、大地が揺れ、砂が盛大に巻き上げられる。だけに留まらず、連続的な掘削音と共に何かが軋むような不快な音が光のドーム内部に響き渡った。

「ぐっ、くううぅ……」

自身の魔法に対する負荷を受け止めるように、ラディアが一人苦しげに呻く。

「ラディアさん!?」

「……心配、する、なっ!!」

彼女は光の障壁に己の力を注ぎ込むように言葉尻を強めた。それに伴って光の強さが増して軋みが消え、急激に掘削音も小さくなった。

「はあ、はあっ」

やがて負荷がなくなったのか、ラディアは僅かに力を抜いて荒く息を吐き出す。どうやら何

者かの奇襲を防ぐことには成功したようだ。
「ちっ」
しかし、彼女は忌々しげに舌打ちし、正面を見据える。と、襲撃者は何ごともなかったかのように静かに砂煙の中に降り立った。
あれ程の衝撃。反動も凄まじいはずなのに。
「単なる体当たりで私の〈ホーリーヴェール〉をここまで揺るがすとはな。少なくともAクラスの魔物と同等かそれ以上と見るべきか」
警戒を強めるようにラディアが告げる間に、砂埃に満ちた視界が晴れていく。
やがて、追撃を仕かけるでもなく悠然とそこに佇んでいた影の形が顕になった。
「こ、こいつは⁉」
その姿に、思わず驚愕を声に出してしまう。
何故なら、それはあの実験室で見た存在。蝙蝠の特徴を持つ人型の異形だったからだ。

④与えられた力

誰も目の前の出来事に理解が追いつかず、何の行動も起こせずにいた。
（これは、あの夜の？）
蝙蝠の如き翼に黒光りする皮膚を持つが、確かに人の形をした存在。その姿に覚えがあるが故に驚き、身動きできないのは雄也だけだろう。
「一体何だ、これは。敵意どころか意思と呼べるものが、何も、感じられない……」
呆然としたようにラディアが呟く。
「まさか〈ブレインクラッシュ〉を？」
『その通おおりっ‼　さすがは魔法学院最強のラディア・フォン・アルトヴァルトであるな‼』
彼女の自問の言葉に答えるように、どこかで聞いた馬鹿でかい声が響く。
「ドクター・ワイルド⁉　貴様の仕業か‼」

試し読み SAMPLE

『ご明察。紹介しよう!!　我が実験体超越人（イヴォルヴァー）が第二号、蝙蝠人（バットロープ）である！』

「ギギ、ギャギャアアァァーッ!!」

ドクター・ワイルドに応じ、蝙蝠人（バットロープ）が蝙蝠の鳴き声とも人の悲鳴とも取れぬ音を発する。

対して、ラディアは不快げに眉をひそめた。

「超越人（イヴォルヴァー）？　蝙蝠人（バットロープ）だと？　貴様は何を言っている!?　これは何だ!?」

『如何に聡明な貴様でも一目で理解はできぬか。だが、責めはすまい。この強制進化の偉業、真に理解できる者などいないであろう故な』

「強制、進化？　……まさか、元は人間か!?」

『正解である』

愕然と目を見開いて問うたラディアに対し、男は愉悦に満ち溢れた声で答えて更に続ける。

『これの素体は、掃いて捨てる程いる平凡な基人（アントロープ）の男に過ぎん。だが、我が実験により、これ程までに素晴らしい力を得たのだ！』

「き、貴様っ！　一般人を拉致し、人体実験を行ったと言うのか!?　〈ブレインクラッシュ〉と言い、こうも容易く人道にもとる行為を！」

声を荒げるラディアの瞳に滲む明確な怒り。

特に、〈ブレインクラッシュ〉と口にした時の表情を見る限り、彼女はその魔法には憎悪とでも呼ぶべき感情を抱いているようだ。

「ラディアさん。その魔法は一体――」

「……人格を破壊する禁呪指定の闇属性魔法だ。人に用いれば廃人同然となり、操り人形と化す。しかも、一度破壊された人格を修復することはできん。もっとも、ある程度の生命力と魔力があれば抵抗することは不可能ではないが……」

『単なる一般人にそれ程の力がある訳がなかろう！　いとも容易く人格を失いおったわ！』

ドクター・ワイルドの嘲りにラディアは奥歯

を噛み締め、鋭い視線を彼に向けた。
「そ、それじゃあ、この人は――」
『意思のない人間など生きているだけの人形に過ぎん。否、今となっては吾輩の道具か』
雄也の問いに対し、些事の如く簡単に答えるドクター・ワイルド。そんな彼の態度に、雄也は我知らず拳を固く握り締めた。
（道具……だと!?）
昨日の話が本当なら、蝙蝠人（バットロープ）の素体となった男性はもう元に戻れない。
その上、人格を破壊され、挙句の果てに道具扱い。人間に対して許される仕打ちではない。
（ふざけたことをっ!!）
余りに身勝手なドクター・ワイルドの言動に、思考が怒りで埋め尽くされそうになる。
「貴様は……人間を何だと思っているのだ!!」
それはラディアも同じようで、彼女はその感情のままに新たな魔法を発動させようとしてか右手を高く掲げた。しかし――。
『おおっと、残念だが、蝙蝠人（バットロープ）の相手は貴様ではないのである』
そうドクター・ワイルドが告げた瞬間、超音波染みた甲高い音がグラウンドに響き渡る。
「な、く、ぐあぁっ！」
ラディアを含め、その場にいたほとんどが耳を押さえて膝をつく。当然、彼女が行使しようとしていた魔法は発現せず、光の障壁もまた形を保てず霧散してしまった。
『一先ず邪魔者には退場して貰おう』
音の嵐の中でも何故かハッキリ聞こえる彼の言葉を合図に、更に高周波音の強さが増した。
「く、ぐう……」
雄也もまた不快な音に脳を激しく揺さぶられ、意識をかき乱されていた。

試し読み SAMPLE

だが、それは気持ちを強く持つだけで耐えられる程度のもので、逆に激情にかられつつあった思考に冷静さを取り戻してくれた。

『この攻撃の中で立ち続けるか。さすがは被召喚者。苦痛への耐性は人一倍であるな』

周囲に目を向けると、既に雄也以外に意識を保っているのはラディアとアイリスだけだった。

その二人も顔は苦悶に歪み、膝をついている。

すぐ近くにいたイクティナは、多分に漏れず目を回して仰向けに倒れていた。

（位置の問題、じゃないか。俺は耐性があるとして二人は――）

よくよく見るとラディアは全身に薄い白銀の光を纏い、アイリスは四つの耳全てが琥珀色に淡く輝いている。

何らかの力で緩和しているようだ。

（けど、完全に防げる訳じゃないっぽいな。学院最強って話のラディアさんでこれなら、他は望むべくもない。アイリスが特殊なんだろう）

その彼女の耳を包む光は徐々に輝きを増す。

少しずつ表情から苦しみが抜けていく。

それに伴い、彼女の眼は獲物を狙う猟犬の如く鋭く細められ、膝をつく体勢も変化していた。

短距離走の選手がスタートする時の如く――。

（アイリス!?）

次の瞬間、彼女は弾かれるように駆け出した。

『ま、待て！　アイリス!!』

ラディアの制止を振り切って速度を上げたアイリスは、いつの間にか両手に構えていた短剣で蝙蝠人（バットロープ）に襲いかかった。

高速で振るわれた二振りの短剣が連続で美しい軌跡を描いていく。

『聴覚遮断か。中々生きのいい素体だが――』

蝙蝠人は、迫り来る白銀の煌きを全て容易く

試し読み
SAMPLE

回避してしまった。
それでも、更に短剣による攻撃を重ねていくアイリス。その動きは実に洗練されており、雄也では目で追うのもやっとだったが……。
やはり蝙蝠人（バットロープ）には届かず、尽く空を切る。
『感覚を一つ潰しては十全に力を発揮できまい』
興覚めしたようなドクター・ワイルドの言葉を合図としたのか、蝙蝠人（バットロープ）は最小の動きでアイリスの一閃を避け、その鳩尾を蹴り飛ばした。
「ア、アイリス!!」
眼前に転がってきた彼女に咄嗟に駆け寄ると、ラディアもまた覚束ない足取りで近づいてくる。
アイリスは両手で腹部を押さえ、うずくまりながら咳き込んでいた。
『今、貴様らに用はないのである』
『何だと？』
その言葉に引っかかりを覚えたらしく、ラディアがハッとしたように顔を上げる。
『……まさか、狙いはユウヤか!?』
そんな彼女の問いを無視し、ドクター・ワイルドが歪んだ狂喜を滲ませた声を発した。
『さあ、ユウヤ・ロクマよ！　吾輩が与えた力を見せるがいい!!　さもなくば、この場にいる全ての者の命はないぞ!!　フゥウーハハハッ!!』
どこまでも自分勝手なその言動に、音の衝撃で沈静化していた怒りの感情が沸々と甦る。
しかし、雄也は同時に困惑もしていた。
（分からない。コイツは一体何がしたいんだ？）
目的が人類の進化だということは、彼の口から聞いている。だが、何故雄也に力を与えたのか。何故態々敵を作ったのか。理解できない。
（……けど、分かってることはある）
それは、言う通りにしなければ彼は何の躊躇もなく、ここにいる全員を本当に殺しかねない

試し読み

ことだ。それだけの狂気が彼の中にはある。
まだ誰も命を奪われていないのは、脅迫の材料として価値があるからだろう。その脅迫の内容に関しては、全く以て意味が分からないが。
『どうした？　何を躊躇している？』
不思議そうにドクター・ワイルドは問うが、普通は躊躇いもするだろう。
そも、敵に与えられた力を軽々しく信用して行使できる訳がない。
今の今まで試そうともしなかったのは、罠の可能性を考えてのことだ。
変身した途端、眼前の存在の如く意思を奪われて暴れ出しては目も当てられない。だが――。
『まさか、蝙蝠人（バットロープ）の命を奪うことに忌避感を抱いているのであるか？　人格なき人形など死体も同然。単なる肉の塊に等しいであろうに』
それを耳にして、雄也は力の行使を決意した。
元より選択肢は一つしかない。今、心を満たす思いも一つだ。方法も分かっている。
「……その言動を以って、貴様を人類の自由の敵と認識する」
雄也はブレイブアサルトの台詞を告げて、腹部に手を当てながら歩み出た。
『ユウヤ!?』
ラディアの戸惑いの声を背に受けつつ、彼女とアイリスを庇うように蝙蝠人（バットロープ）と対峙する。
その時には、昨夜与えられたＭＰドライバーが雄也の腰に現れていた。
『何をするつもりだ！　ユウヤ、下がれ!!』
彼女の言葉を黙殺し、何度真似したか知れない構えを取る。そして……。
「アサルトオンッ!!」
《Change Therianthrope》
雄也の叫びに合わせて電子音が鳴り響き、体

試し読み
SAMPLE

が変質を始めた。
　全身に狼の如き特徴が現れ、元の世界の伝説に謳われる狼男（ウェアウルフ）のような姿となる。
　しかし、変化した姿が顕となったのは一瞬のみ。瞬く間に全身を、純白を基調に琥珀色の紋様が描かれた装甲が覆い隠していく。
『フゥウーハハハハッ!!　それでよい。それでよいぞ！　ユウヤ・ロクマ!!　さあ、始めようではないか。我々の闘争（ゲーム）を!!』
　その言葉を合図に蝙蝠人（バットロープ）が再び動き出す。
　迫り来るその動きはアイリスの攻撃をいなしていた時と比べ、一段と速くなっていた。
　にもかかわらず、雄也の目は蝙蝠人（バットロープ）の動きを正確に捉えていた。
　とは言え、所詮は碌に喧嘩もしたことのないずぶの素人。本来ならば、何らかの反応を示すことすら困難なはずだったが……。
　雄也は、洗練されていない大げさな動きながらも、相手の攻撃を尽く避けていった。
　変身によって動体視力が向上しているようだ。
「そこだっ！」
　更には、数瞬先を予測して放った拳が、拙い構えに反して鋭く対象の脇腹を穿つ。
　その一撃は肉に減り込む不快な感覚を雄也に与えながら、蝙蝠人（バットロープ）を軽々と弾き飛ばした。
「グ、ギャ、ギャギャ……」
　素人の一撃は、思った以上のダメージを与えたらしい。地に転がされた彼は、奇怪な呻き声を上げながら立ち上がるのに手間取っていた。
　激しい音波の嵐もピタリと止んでいる。
『ユウヤ……お前、一体……』
　呆然とした声に僅かに振り向くと、目を見開くラディアの姿。隣で蹲るアイリスもまた、無表情を崩して瞳を驚愕の色に染めている。

読む読む SAMPLE

そうしたシチュエーション。
酔ってしまうのも無理もないことだろう。
「勇気の灯火を掲げ、自由の荒野を突き進む戦士。ブレイブアサルト」
だから、つい番組内ではなくヒーローショーでのみ使用されたレア口上を口にし――。
「……その意思を受け取った者」
途中で我に返って言葉をつけ足した。
特撮オタクに過ぎない者が、憧れのヒーローを名乗るなどおこがましい。
『よいぞよいぞ!!　やる気ではないかっ!!』
囃し立てるドクター・ワイルドに羞恥が湧く。
とは言え、今は鉄火場の只中。
それぐらいの気概で挑む必要はあるだろう。
そう自分に言い聞かせ、記憶の中にある構えを取って改めて蝙蝠人（バットロープ）と向き合う。
だが、彼は先程の一撃で地上での近接戦闘は危険と判断したようだ。
（飛んだ!?）
蝙蝠人（バットロープ）は空へと逃れると、そこから地に足をつけていた時とは比べものにならない速度で襲いかかってきた。
「ちっ」
落下のスピードを加算して翔け抜け、回避はできたものの鋭い爪が肩の装甲をかする。
「ユウヤッ!?」
その光景にラディアが悲痛な叫びを上げた。
腕を切り落とされたと思ったようだ。
もしも生身だったなら、その程度で済めば、むしろ御の字というところだろう。
だが、実際のところは僅かな衝撃を感じたのみで、痛みはほとんどなかった。
ドクター・ワイルドの言う魔力を物質化した装甲。生半可なものではないようだ。

試し読み
SAMPLE

（しかし、どうしたものか）

強化された動体視力のおかげで、更に加速した蝙蝠人（バットロープ）の速度を目は捉えることができる。

だが、それだけだ。

肉体を操る者が素人では、先程のように的確にカウンターを命中させるのは厳しい。

（まあ、こういう時のために、特撮ヒーローには人間を超えた感覚がある訳で……）

更には近年。それに特化した形態（フォーム）もザラだ。

幸い、この獣人（テリオントロープ）形態とでも言うべき状態は正に身体強化と感覚強化のいいとこ取り。

そして何より、このＭＰドライバー。

雄也の知識を基にしたからか、意に反して色々と馴染んでしまう。

戦闘に関わる機能が、直感的に分かる。

（状況に適した武器も、今や常識だっ！）

《Bullet Assault》

雄也の意思に応えたように電子音が鳴り、手の中に装甲と同じ配色のハンドガンが現れる。

その現象を雄也は当たり前に受け取り、速やかに空の蝙蝠人（バットロープ）へと引金を引いた。

同時に、銃口からは反動もなく黄褐色の光球が射出され、黒い肌に吸い込まれていく。

接近に転じる前に狙いを定めれば、鋭敏な感覚が命中へと導いてくれる。

「グギャ、ギャアアッ！」

そして直撃と共に上がる悲鳴の如き声。

そこに人間の名残が確かに感じられたが、雄也は攻撃の手を緩めなかった。

「ギャア、ギャ、グギャッ！」

二度、三度と攻撃が命中し、蝙蝠人（バットロープ）の浅黒い肌を抉り、鮮血が舞う。

だが、どうやら攻撃力が不足しているようだ。

致命打には至っていない。

試し読み

血塗れのまま再び空に舞い上がり、雄也に襲いかかるために位置エネルギーを蓄えている。
余りに痛々しい。
これだけのダメージを負いながら、逃げる素振りもない。そもそも許されていないのだ。
一秒でも早く解放してあげなければ。
（力が足りないなら、力を束ねればいい。一撃に、全ての力を込める!!）
《Convergence》
その思いを受けたように電子音が鳴り、強大な力がハンドガンに収束していく。
（集中だ、集中しろ……）
そして雄也は、蝙蝠人（バットロープ）の一挙手一投足。風を切る音。匂い。気配を感じる全ての要素を以って正確な位置を割り出し……。
《Final Bullet Assault》
「アンバーアサルトシュートッ!!」
急降下と共に仕掛けられた攻撃を回避すると同時に、蓄えられた力を爆発させ、琥珀色に煌く弾丸をタイミングよく解き放った。
その恐るべき力の証明の如く輝きが視界を埋め尽くし、一瞬蝙蝠人（バットロープ）の姿を見失ってしまう。
「ギャギ、ギャアァァァ……」
しかし、強大な一撃は間違いなく直撃したようだ。もはや蝙蝠人（バットロープ）はまともな飛行を保つことができず、慣性によって少し先の地面に頭から突っ込んでいく。
力を失ったその体は土埃を立てながら地面を滑り、摩擦によってようやく止まる。
ピクリとも動かなくなった蝙蝠人（バットロープ）は、やがて怪しげな光を放ち始めた。
輝きは明滅しつつ、少しずつ強くなっていく。
（これは、まさかっ!?）
その結末は予想に容易いもので……。

試し読み

やがて限界を迎えたように一際眩い閃光を発したかと思うと、案の定、蝙蝠人（バットロープ）は突然爆散してしまった。

飛び散った肉片は地面に落ちると共に、溶けるように跡形もなく消え去っていく。

（お約束……いや、証拠隠滅か？）

そんなことを考えつつも一先ず緊張感から解放された雄也は、深く息を吐くと共にハンドガンを下ろしたのだった。

試し読み
SAMPLE

本を作ろう、本で読もう

teapot-novels.com

≪ 続きは書籍でお楽しみください